

指導資料

鹿児島県総合教育センター

教育相談 第124号

—小、中、高、特別支援学校対象—

平成19年10月発行

児童生徒の人間関係力を高める教育相談

核家族化，少子化が進む中で，子どもたちは，日常生活の中で豊かな人間関係を築く力を自然に身に付けることが難しくなっている。

文部科学省が平成15年に公表した「学校教育に関する意識調査」（調査対象：小3，小5，中2計7,067人）の中で，学校生活で楽しいことや学校生活で不満なことの両方に「友達との関係」が挙がっており，これは，不登校やいじめなど様々な不適応行動とも結びついていると考えられる。

社会生活は，人と人とのかかわり合いの中で成り立っている。人間関係を築く力を育成することは学校教育においても重要な課題の一つとなっている。

そこで，ここでは学校段階に応じた児童生徒の人間関係力を高める教育相談について述べる。

1 児童生徒の実態から

平成18年度，当教育センターで児童生徒を対象に「学校生活や悩みに関する実態調査」を実施した。

学校生活の中で不安を感じる頻度が「いつもある」，「時々ある」と答えた

児童生徒は，その原因としていずれの学校段階においても，高い割合で「友達との関係」を挙げている（図1）。

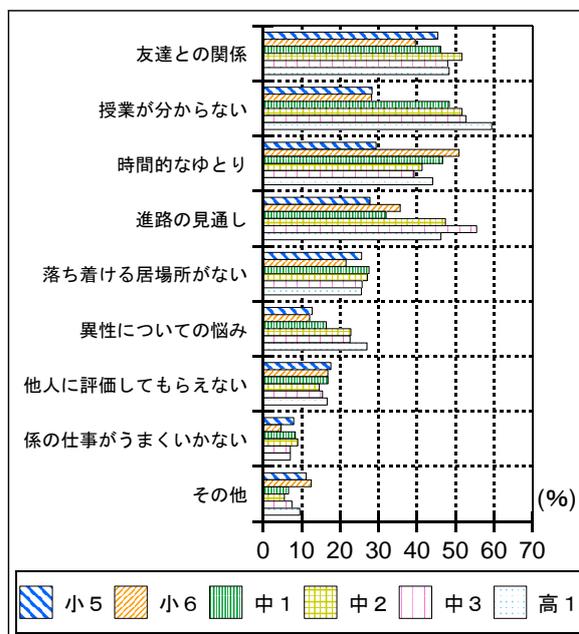


図1 不安を感じる原因

調査時期：平成18年9月下旬～10月上旬
調査対象：小学5年生599人，小学6年生615人，中学1年生497人，中学2年生484人，高校1年生513人，計3,173人

その反面，学校生活での楽しみとしても「友達との交流」を挙げている。こうした結果は，児童生徒にとって「友達との関係」が，楽しい学校生活を過ごすために重要な意味をもち，児童生徒の様々な不適応行動の未然防止を図るためにも，人間関係力の育成が重要となっていることを示すものである。

2 各学校段階における人間関係力とは

人間関係力とは、人間関係を築く力のことで、「対人関係を築く知識を基に、人とコミュニケーションをとり、感情の交流をしたり、協力して活動したりする力」である。「児童生徒の望ましい職業観・勤労観を育む教育の推進について」（平成14年11月国立教育政策研究所生徒指導研究センター）の中では、人間関係を築く力を人間関係形成能力ととらえ、各発達段階別に表1のように示している。

表1 職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み例（抜粋）

学校段階	人間関係形成能力	
	自他の理解能力	コミュニケーション能力
小学校（低学年）	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の好きなことや嫌なことをはっきり言う。 ○友達と仲良く遊び助け合う。 ○お世話になった人などに感謝し、親切にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○あいさつや返事をする。 ○「ありがとう」や「ごめんなさい」を言う。 ○自分の考えをみんなの前で話す。
小学校（中学年）	<ul style="list-style-type: none"> ○自分のよいところを見つける。友達のよいところを認め、励まし合う。 ○自分の生活を支えている人に感謝する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の気持ちをわかりやすく表現する。 ○友達の気持ちや考えを理解しようとする。 ○友達と協力して、学習や活動に取り組む。
小学校（高学年）	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の長所や欠点に気付き、自分らしさを発揮する。 ○話し合いなどに積極的に参加し、自分と異なる意見も理解しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○思いやりの気持ちを持ち、相手の立場に立って考え行動しようとする。 ○異年齢集団の活動に進んで参加し、役割と責任を果たそうとする。
中学校	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の良さや個性が分かり、他者の良さや感情を理解し、尊重する。 ○自分の言動が他者に及ぼす影響が分かる。 ○自分の悩みを話せる人を持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○他者に配慮しながら、積極的に人間関係を築こうとする。 ○人間関係の大切さを理解し、コミュニケーションスキルの基礎を習得する。 ○リーダーとフォロアーの立場を理解し、チームを組んで互いに支え合いながら仕事をする。 ○新しい環境や人間関係に適応する。

高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ○自己の職業的な能力・適性を理解しそれを受け入れて伸ばそうとする。 ○他者の価値観や個性のユニークさを理解し、それを受け入れる。 ○互いに支え合い分かち合える友人を得る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○自己の思いや意見を適切に伝え、他者の意志等を的確に理解する。 ○異年齢の人や異性等、多様な他者と、場に応じた適切なコミュニケーションを図る。 ○リーダー・フォロアーシップを発揮して、相手の能力を引き出し、チームワークを高める。 ○新しい環境や人間関係を生かす。
------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

3 人間関係力を高めるに当たっての観察の視点

児童生徒の人間関係力を高めるに当たっては、授業だけでなく、教育活動全般における観察や指導、援助など教師のかかわりが必要である。その際に大切な、教師が児童生徒を観察する三つの視点を以下に述べる。

(1) 自分と共に相手も尊重して大切にしているか。

自己を見つめ、自分の特徴を知っているかが大切である。また、相手の立場に立ち、いろいろなものの見方や考え方があることを理解し、自分と異なる意見も尊重することが必要である。

(2) 言葉で伝え合う技能を身に付けているか。

自分の気持ちを相手、目的や場面などに応じて的確に伝える力を身に付けることが大切である。また、相手の言葉をきちんと聞き取り、意図をくみ取る能力が必要である。

(3) 生活上の問題を解決し、望ましい人間関係を築こうとしているか。

学級や学校における生活上の問題を話し合っ解決しようとする態度が大切である。また、集団での活動を通して、望ましい人間関係について理解し、それを実現しようとする態度が必要である。

4 人間関係力を高める活動例

ここでは、前述の人間関係力を高めるにあたっての三つの観察の視点を踏まえた活動例を示す。

(1) リフレーミングを活用した学級活動 (小学校高学年及び中学校) 「みんなでリフレーミング」

※ リフレーミング：認知の枠組みを変えること

過程	主な指導の流れ
導入 (10分)	(1) 本時の学習の動機付けを行う。 「今の自分に自信がありますか」 ① 自分のよさに気付こう ② 他人に対する多様な見方 (2) リフレーミングについて説明する。 ○ 自分の短所も見方を変えれば長所でもある。この見方を変えることを「リフレーミング」という。 ※ 絶対に相手の短所についてからかったり、ふざけたりしないことを注意する。
展開 (30分)	(3) 日ごろ自分の短所と考えている性質、性格をワークシートに各自記入させる。 ※ 短所を語ることに抵抗を示す児童生徒には、活動の様子を観察させるなど配慮する。 ※ 記入するときは話をしない。 (4) 2人組をつくり、ペアができたらもう1組のペアと一緒にになり、4人組をつくらせる。 一方のペアと欠点を記入したワークシートを交換させる。 ペアに1枚リフレーミング辞書を配り、各ペア2人で話し合い、相手ペアが書いた短所を長所に書き換えさせる。 ※ 辞書に言葉が見つからなかったときは、2人で話し合い、考えた長所に書き換えさせる。 ※ 話し合っても考えつかない場合は、教師に質問することを伝える。 (5) 記入が終わったら、4人組になり、リフレーミングした内容を一人ずつ、発表させる。 ※ からかいやふざげがないか児童生徒のグループの活動状況をよく観察し、場合によっては教師が趣旨に反する言動等を制止する。 (6) リフレーミングの結果を聞いて、各自感じたことを各グループ出し合わせせる。 (7) どのような感想が出たか、各グループから全体に発表させる。

終末 (5分)	(8) リフレーミングのよさや気持ちの持ち方の大切さを伝える。 ○ 短所にとらわれていないか。 ○ 短所と思っていることも、見方を変えることで気持ちが楽になる。 ○ 他人に対しても、柔軟な見方ができれば生活が楽しくなる。
------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

※印は、指導上の留意点

(2) 特性要因図（フィッシュボーン）を活用した学級活動（中学校及び高等学校） 「いじめについて考えよう」

過程	主な指導の流れ
導入 (10分)	(1) 本時の学習の動機付けを行う。 「いじめはなぜ起こるのか」 ア いじめはなぜ起きるのか原因について考えさせる。 イ これからいじめをなくすには、一人一人がどのようなことに注意していかねばならないのかを考えさせる。 (2) 特性要因図について簡単に説明する。 (3) 「いじめはなぜ起きるのか」について特性要因図を使い、その要因について考えさせる。 ※ 主要因については、いじめの四層構造を主要因とする。 ① いじめを受けている子 ② いじめている子 ③ 周りではやし立てる子 ④ 見て見ぬふりする子
展開 (35分)	(4) 5～6人のグループをつくる。各グループに、すでに「特性」、「主要因」の記入された特性要因図（ワークシート）を配布する。 (5) 各グループ、ブレインストーミングの要領で、要因ごとに自由に意見を出し合い、要因を掘り下げていく。出た意見は、ワークシートに記入する。 ※ 出た意見は尊重し、からかったり、けなしたりしないように注意する。 ※ 教師は、要因の掘り下げがうまくできていないグループがないか観察し、必要に応じて助言する。 (6) 意見がほぼ出尽くし、記入がすべて終わったら、特性要因図を見ながら、①～④の主要因それぞれについて、どの要因が影響が大きいと話合おう。 ※ グループで意見が出にくかったり、意見を出しにくい状況がある場合は、あらかじめカード（付箋紙等）を配布し、各自記入をしてから、グループで特性要因図に整理・列挙していく方法もある。

	(7) いじめの発生要因について、グループごとにまとめる。 (8) 各グループ、まとめの結果を全体で発表する。
終末 (5分)	(9) いじめの発生原因についてまとめ、いじめのないよい人間関係を築いていくためにはどうあればいいかまとめる。 ○ 当事者だけの問題だけでなく、周囲のかかわりも大きいことを理解させる。 ○ 自分たちの気付かない行動がいじめを助長していることになることに気付かせる。

※印は、指導上の留意点

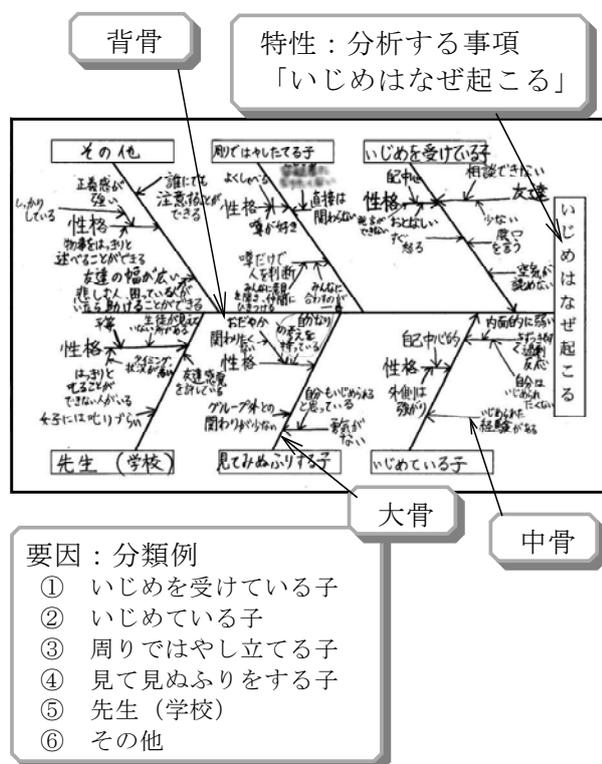


図2 特性要因図の作成例

特性要因図とは、問題としている特性（結果）とその特性に影響を与えていると思われる要因（原因）を、魚の骨のような系統図で分かりやすく示したものである。原因を検討したり、探ったりするために利用される問題解決討議法の一つである。

記入は通常、右端に「特性（分析する事項）」を置き、この特性に向けた水平の矢線（背骨）を引く。その上下から斜めに接する

矢線（大骨）で「要因（分類）」を示す。それぞれの要因についての要因は、順次、中骨、小骨と分岐させて記入していく。要因を挙げたり整理したりする場合は、ブレインストーミングによって、参加者から多くのアイデアを取り入れる方法が一般的である。

特性要因図の作成例でみると、生徒がいじめに対する様々な考えや思いを系統的に記入することで、生徒自身だけでなく教師にも課題が明確になり、その後人間関係づくりを進める際の手がかりが得られる。

児童生徒に、豊かな人間関係を築く力を身に付けさせるためには、まず、他者との関係の中で自分自身を見つめながら、集団の一員として他者とどのようなかかわり方が望ましいのかを相手の立場に立って考えさせることが必要である。

その上で、実際場面に即した活動を工夫し、人とのコミュニケーションをとり、感情を交流させたり、互いに協力して活動したりするなどの人間関係力を、実践的に養うことが大切となる。

したがって、教師は、教育相談の日常化を通して、児童生徒の人間関係力についての課題を探りながら、その課題解決に向けた活動を、あらゆる場面で意図的、計画的に展開していくことが大切であると考えられる。

【引用・参考文献】

文部科学省「学校教育に関する意識調査（中間報告）」平成15年
 日本教育評価研究会「指導と評価」2006年10月号
 国立教育政策研究所生徒指導研究センター「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」（調査研究報告書）平成14年11月
 國分康孝監修「エンカウンターで学級が変わる」中学校編part2 1997年 図書文化

（教育相談課）